

碧山 SC の運営に関する研究

The study of administration about HEKIZAN SC

1K05A141

指導教員

主査 間野義之先生

田中 真央

副査 横山文人先生

【1. 背景】

わたしが総合型地域スポーツクラブではなく、小学校のクラブ活動についての研究にいたった理由が、大学より始めた西東京市立碧山小学校碧山SCでのサッカーコーチの経験がきっかけである。

そこには、日々ともに学習し、遊び、生活している子ども達の笑顔があり、ボールを蹴る姿があった。

少子高齢化や指導者不足によるクラブ活動の衰退がさげばれているが、この景色が日本に最も根ざしたスポーツ環境であると確信している。子供たち・保護者にとって、より良いクラブ環境とはどういったものなのか。現状を維持するのではなく、様々な課題点を抽出し、どう改善していけば良いか、深く考えるようになった。

【2. 研究目的と研究方法】

碧山SCの様々な問題や子ども達からの意見をもとに現状を整理する。子ども達と保護者が、何を重要と考え、問題であると捉えているか。これからの改善点を見つけ出すことが今回の目的である。研究方法として、碧山 SC の子ども・保護者にアンケート調査を行い、自由記述のまとめとともに、SPSS を用いて分析を行った。

【3. 結果とまとめ】

碧山 SC における改善点を(1)コーチの資質について(2)運営について(3)クラブ方針について、の3つに分類した。

■コーチの資質については、「礼儀」「厳しさ」と

いうキーワードが保護者から多く聞かれた。サッカーだけではなく、「礼儀」「常識」も教えてほしいと考える保護者が多いことが分かった。練習が始まれば、集中していない子にはきちんと対応しなければならない。強いチームこそ「礼儀」といったことがきちんとできているものである。さらにコーチ間についてである。「コーチの考えに差がある」との意見があったが、これも大きな問題である。コーチそれぞれの教え方や考え方があって当然であるが、毎回練習に入れないのであれば、コーチ同士の考え・方針を明確にし、担当と違うコーチが入っても一貫した練習を提供できるようにしなければならない。子ども達は迷ってしまう。

■運営については、「6年保護者だけで運営するのに少し無理がある」との意見があった。これを改善する為にも、負担の分担を考えるべきである。各運営担当に6年保護者だけを就かせるのではなく、他学年の保護者からも補助をつけると、6年保護者の負担が軽減されるだろう。それによって他学年保護者が6年保護者の立場となり、中心となって運営を行っていく際の予行練習にもなる。また、自由記述にあった「直接運営するのが6年保護者で毎年交代のため改善点を見出してもなかなか改善に至らない」という問題も少し解消するだろう。さらに今後は、「親やコーチによってやり方が違うわけだから、練習試合の要求などはコーチからあると有り難い」との意見があったように、保護者だけに運営を任せるのではなく、その一端としてコーチも参加し、双方の話し合いの場を設けることも大切だろう。

■クラブ方針については、練習・試合などすべ

ての原点だと言える。つまり、「皆が平等に試合に出るなど楽しむサッカーをする」のか「碧山 SC が強いチームにし、勝つサッカーに徹する」のか。しかし今橋(1988)が「技術的にある水準に達したものを選手として選抜し、試合に参加させる。このエリート主義・勝利至上主義に傾斜し、「部活」がもつ人間・集団形成力、それぞれのレベルの生徒にもつ意味・役割・感動を軽視につながるものが問題なのか。それとも、より多くの生徒が続けることを重視し基本にした「部活」のなかで、より高度な技術・運動能力を形成したいという生徒・父母の要求にどう対応していくか。」と述べているよ

うに、「勝つ」ことだけにこだわった方針でクラブを進めていくことは難しい。これまで新役員始動とともにコーチで話し合い、1 年間の方針を決めてきたが、子ども達は「勝つサッカー」も「楽しむサッカー」も共に経験したいと考えており、コーチがしっかりとこの問題を理解し、コーチ同士で共有することで、子ども達・保護者にきちんと説明できるかである。コーチが変わっても、子ども達は変わらずプレーし、また碧山 SC は存在し続けるということも忘れてはならない。つまり、コーチが変わり、子ども達が変わっても、変わることはない碧山 SC のクラブ方針を構築しなければならない。